

Topics

ホストン美術館 ビゲロー・コレクションのきものが初里帰り

Kimono Beauty

—シックでモダンな装いの美 江戸から昭和—

文人画再発見！～西谷コレクションを中心に～





須田悦弘展をご覧になりましたか。展示会場に入ると、幾つかの構築物のあることに気付いても、作品らしいものを壁や展示ケースに、俄かには見つけられない。薄くらい室内に置かれたブリキ製のかまぼこ型の建屋の中をまず覗き込むと、天井から床まで金箔が全体に貼られた空間が目の前に現れる。どこかに何かがある筈だ。目を凝らせば、奥まったところに小さな花瓶に1本の草が挿されていることに気付いて、「ほおっ」と声にする。

狭く細長い廊下のような空間の奥には、木彫の泰山木の花が見つかる。固定壁の前に立てられた仮設の壁との間に朝顔の花が咲いている。アルミサッシの窓の外には、朴の木から彫りだして彩色を施した1枚の枯葉が落ちている。「あっ！ここにあった」と同行の人と楽しげに、あるいは興奮気味に語り合う。出品リストにある「雑草」は、何処にあるのだろう。雑草は、ガラス展示ケースのなかには無く、その外にあったり、監視の座る椅子の下にさりげなく生えているのだ。監視の女性に作品の在りかを聞く観客もいる。「あそこで見つけましたよ」と教える人もいる。作品を介して観客の間に会話が生まれ、その芸術について真摯な意見の交換が行われる。須田はインスタレーションという手法をとって、会場全体を自分の芸術空間とし、創造的に造形化しているのである。どこに何があるか、須田の何がそこにあるのか。現代美術の面白さである。

まだ大学院を出たばかりのころわたしは、その当時、美術史学会の重鎮であった丸尾彰三郎先生(註)に、美術館や博物館で美術作品を見るときは、作品を目の当たりにしてその作品について話し合うこと、意見を交わすことこそ重要だ。そこから、いままで気付かなかったこと、研究の際のアイデアも浮かんで来る。作品を一人で黙って見ていると仕方がないと指導を受けた。

だからと言ってわたしは、作品を一人静かに鑑賞しようとするのを批判や否定しているのでは決してない。静寂の中で作品の鑑賞に沈潜して行くこと。結構であると思う。しかしである。作品を前に思わず言葉が出てしまうこともあろう。話をするのも悪ではないだろう。一人ひとりいろいろな鑑賞法があって良い筈で



(上)「須田悦弘展」より《雑草》

(註) 丸尾彰三郎(1892-1980) 文部省国宝監査官、慶應義塾大学講師などを歴任。ヒットラー政権下のドイツへ出張、叙勲し、ヒットラーと握手をしたという逸話をもつ。

ある。展示室に静かさが保たれるのは当然だ。他の鑑賞者に対する配慮を欠くおしゃべりや私語は、わたしも断じて許せない。すでに述べたこともあるが、欧米では、小児の時から、美術館で観ること、話すこと、考えることを学んでいる。こうでなくてはならないという美術館での作品の見方、接し方は恐らくないだろう。少しゆとりのある心をもって他人のやり方、考え方を許容するというのも、美術を愛好者にとって、ありていに言えば「大人の振る舞い」ではないだろうか。美術館・博物館は、公共のものなのであるから。

2012年も残り少なくなり、2013年1月から始まる展覧会をご案内する候となった。千葉市美術館では、1月4日から「Kimono Beauty—シックでモダンな装いの美 江戸から昭和—」の開催を予定している。「ボストン美術館 ビゲロー・コレクションのきものが初里帰り」とも謳っている。ウィリアム・スタージス・ビゲロー(1850-1926)は、米国・ボストンの裕福な貿易商の家に生まれ、ハーバード医学校を卒業後、パスツールのもとで細菌学を学んだ医師であったが、大森貝塚の発見者であるエドワード・モースからの強い影響によって日本を訪れ、日本文化を心から愛するようになり、アーネスト・フェノロサの助言を得て、日本美術の収集に情熱を傾けた。現在ボストン美術館には、ビゲローから寄贈を受けた、絵画、彫刻、工芸の作品が約4万点強を数えるという。きもののコレクションもその一部を占めている。この特別展は外国人の目を通したきものへの評価に着目しながら、世界に誇るきもの文化の魅力を探るもので、きものみに限らず、帯、髪飾りなどの装身具、また当時の風俗をいきいきと描いた絵画作品も展示の予定である。

日本のきものは、縦を意識した構造とデザインをもっている。身体を締め付けるように着付ける西洋の服に比較して、着方もルーズだ。西洋人の美意識が人体を基準にして、立体的な把握を重視するのに対して、日本人の美意識は平面性にあり、きものも羽織る、着せかけるという感じである。浮世絵の美人画にはそのことが見て取れる。文様に山水や草花がモチーフとされ、時には文学的内容を伴い、絵画的に表されるのも日本のきものの特徴だろう。

1月4日の展覧会初日には、館員で可能な者はきもんで出勤し皆様をお迎えすることになっている。本展監修者である共立女子大学の長崎巖教授もわたしも実は和服着用の予定である。みなさまも和服をお召しになってご来場下さり、きもの魅力を満喫して頂きたいと願っている。

最後に、千葉市美術館に対して2012年に賜りましたご支援を感謝し、来る2013年もまた旧倍のご後援をお願い申し上げます。

[館長 河合正朝]

Kimono Beauty

—シックでモダンな装いの美 江戸から昭和—

“Kimono Beauty”展は、きもの、帯、女性風俗を描いた絵画や雛形本、櫛かんざし類など総数300点以上の作品が展示される華やかな展覧会です。このうちボストン美術館に所蔵されるビゲロー・コレクションのきもの17点と雛形本7点は、今回はじめての里帰り公開となる展覧会の核を成す作品です。

ここではまずビゲロー・コレクションについてご紹介しましょう。ボストンの富豪で医学の名門の家柄に生まれたウィリアム・スタージス・ビゲロー(1850-1926)は、明治15年~22年(1882-89)の間日本に滞在しました。大森貝塚の発掘で知られる動物学者エドワード・シルベスター・モース(1838-1925)の影響で、その三度目の来日に同行し、すでに日本の生活には慣れていたモースの家に同居したビゲローの最初の一年の様子は、モースが書き残した『日本その日その日』によって一端を知ることができます。これは日本でも刊行されていますので、ご興味のある方は一読をおすすめしますが、その記録からは、ビゲローが、初来日の直後に日本食をすっかり平らげてモースさえ驚かせたエピソードなど、積極的に日本に親しもうとしていた様子をうかがうことができます。



(左から) エドワード・モース、岡倉天心、アーネスト・フェノロサ、ウィリアム・ビゲロー

当初は観光旅行程度の気持ちであり、まずは刀剣甲冑の収集に興味があったようですが、結局は8年もの間日本に滞在し、心から日本を愛したビゲローは、より日本人に近い存在であろうとしたようでもあります。日本滞在中には三井寺の法明院で修行、仏教に皈依しており、その後ボストンで没したビゲローの遺骨は、遺言により分骨されて同寺に送られ、墓が建てられています。日本文化に親しむ中で、もはやジャンルにとらわれずビゲローは、美しいと思う物を意欲的に集めていったのです。

東京美術学校の設立に寄与し、後にボストン美術館の最初の日本美術部長を勤めたアーネスト・フェノロサ(1853-1908)がビゲローと共に同行した東京から京都、さらに岩国への収集旅行にあたって、モースは、「我々はボストンを中心に、世界一の日本美術コレクションを持つようになるだろう。」と予告しており、事実帰国後の1911年にビゲローは、絵画4,000点、浮世絵版画34,000点をはじめ、染織、金工、漆工、刀剣甲冑など膨大な日本美術コレク

ションをボストン美術館に寄贈したのです。まだ日本人があまり自国の美術、特に浮世絵の美術的価値に気付かずいた時代の収集だけあって、ビゲローのコレクションは質・量ともに素晴らしいものになりました。ちなみにその膨大なコレクションの一端は、千葉市美術館でも「喜多川歌麿展」(1995年)、「鈴木春信展」(2002年)、「鳥居清長展」(2007年)、「ボストン美術館 浮世絵名品展」(2011年)で展示したことがありますので、ご記憶の方もいらっしゃるでしょう。

ビゲローのきものコレクションをきっかけに展開されるこの展覧会ですが、同美術館からは、今回もう一つ大事なコレクションが出品されます。それは雛形本と呼ばれる江戸時代のきものデザインブック7点で、最新流行の模様を眺めて楽しんだり、実際に呉服屋への注文に使われたものです。特に最古の雛形本といわれる寛文6年(1666)版『御ひいながた』が含まれているのは注目すべきことです。寛文小袖と称される大柄で大胆な模様のきものデザイン画を表したこの版本は、研究者でも実見する機会がほとんどない希少な本だそうです。

■“Kimono Beauty”展の構成と見どころ

国内のコレクションからも、共立女子大学をはじめとした所蔵機関から、江戸時代中期から昭和時代の素晴らしいきもの数々が出品されます。展示構成を紹介しますと、まず第一章の「江戸時代の小袖」では、武家、公家、町人と階層を分けてきものを展示し



ます。綸子地に草花などを全体に散らしたのものや、縮緬地の風景、王朝文学の模様が多い武家、比較的大きめの草花・花卉模様などを特徴とする公家、友禅染に代表される染めが主流の町人のきものや帯などを通して、それぞれの階層の装いの様子や美意識が理解されます。



(上)《紫紵地風景模様単衣》江戸時代・19世紀 ボストン美術館蔵 Photograph © 2012 Museum of Fine Arts, Boston

(左)《紅綸子地梅樹几帳模様振袖》江戸時代・18-19世紀 共立女子大学蔵(1月22日~2月11日展示)

(右)《白麻地藤岩躑躅模様帷子》江戸時代・19世紀 共立女子大学蔵(1月4日~1月20日展示)

またこの章では、女性風俗を描いた絵巻や版本を展示することで、現代の「着付け」ともまた違って、意外に自由な感じさえる装いの様々もイメージしていただければと思っています。そして澤乃井櫛かんざし美術館からは30点ほどの櫛かんざし類も展示されます。江戸中期からは、このような装身具が華やかに発達し、町人女性に至るまで闊達におしゃれを楽しんでいたことも注目すべきことでしょう。



西川祐信《四季風俗図巻》(部分) 江戸時代・18世紀 千葉市美術館蔵



《花形珊瑚櫛簪》江戸時代・18-19世紀
澤の井櫛かんざし美術館

第二章は「明治時代のきもの」です。このコーナーのきものには、地味で渋い好みを感じることでしょう。鼠色などの縮緬地に、小柄な棲模様が入る形式で、江戸時代後期の町人のきもの美意識を継承したものと言われています。こうした地色の地味な色合いのきものでは、帯が装いの決め手となっていることも忘れてはならないでしょう。明治時代後期にも、引き続き裾や棲中心に模様が入ることが多いのですが、化学染料の普及による影響もあり、模様の色は鮮やかになっていきます。

第三章は、「大正時代のきもの」です。この時代には色模様の雰囲気が大きく変化し、日本的な模様が洋風の陰影表現で表されたり、アルプスやヨットの柄など洋風のモチーフが模様になったりという斬新なデザインのきものが出されています。化学染料も普通の時代になり、より気軽に様々な染め模様を楽しむ時代になっていたのでしょう。

第四章は「昭和時代のきもの」で、アール・デコの影響による斬新で自由なデザインが、さらに豊かに展開された時代です。モダンなデザインには、新しいモチーフも積極的に取り入れる柔軟な姿勢が感じられ、その多様さには驚かされます。ここでは同時に、絹織物の中でも、比較的求め易く広く普及し、大胆で多様なデザインが人気を集めた昭和の銘仙のきものも展示しています。明るい色彩、モダンで幾何学的なデザインが現代の若い女性にも支持されているところで、現代のきものファッションにとっても、刺激的な内容になることでしょう。

そのほかにも各時代の豪華な婚礼衣装、子どもの可愛らしいきものなどが展示される予定で、きものだけでも約200点(※会期中で大幅な展示替えがあります)を集めたお正月に相応しい華やかな内容の展覧会です。どうぞこの機会に、江戸から昭和にいたる日本の伝統的な装いの文化や美意識に触れていただければと思います。また会期中は「きもの割引」なども行っており、きものでのご来館を特に歓迎しておりますので、日頃きものを着る機会のないという方も、是非お召しになってお出かけ下さいますようお願い申し上げます。

[学芸課長 田辺昌子]



《縹地捻り麻葉模様銘仙単衣》
昭和時代・20世紀
須坂クラシック美術館蔵
(1月4日～1月20日展示)

関連イベント

■新春の獅子舞

展覧会初日の開館時に、会場入口で獅子舞がお迎えます。

出演:登渡神社登戸神楽囃子連

1月4日(金)/8階展示室入口にて/観覧無料

■特別企画「新春箏の調べ」

出演:[箏曲 朝香会]朝香桂子、朝香麻美子(千葉市芸術文化新人賞受賞)

1月4日(金)15:30より(15:00開場)/1階さや堂ホールにて/先着150名/観覧無料

■記念講演会「Kimono Beauty 江戸から昭和まで」

講師:長崎巖(本展監修者・共立女子大学教授)

1月20日(日)14:00より(13:30開場)/11階講堂にて/定員150名/聴講無料
※事前申込が必要です。詳しいお申込方法はチラシまたはホームページをご覧ください

■市民美術講座「海外に渡った日本美術」

2月9日(土)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料

講師:田辺昌子(当館学芸課長)

■美術館ボランティアスタッフによる多色摺木版画ワークショップ

1月26日(土)10:30~12:00、13:00~15:30

1階エントランスにて/参加無料

Kimono Beauty —シックでモダンな装いの美 江戸から昭和—

2013年1月4日(金)▷2月11日(月・祝)

[休館日] 1月7日(月)、1月21日(月)、2月4日(月)

[観覧料] 一般1000(800)円、大学生700(560)円

※小・中学生、高校生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※()内は前売、団体20名以上、および市内にお住まいの60歳以上の方の料金

※前売券はローソンチケット(Lコード:39865)、セブンイレブン(セブンコード:019-776)、千葉都市モノレール「千葉みなと駅」「千葉駅」「都賀駅」「千城台駅」の窓口(12月16日まで)にて販売

文人画

再発見!

—西谷コレクションを中心に—

Hello Again!
Literati Paintings
from the Nishitani
Collection



(図1) 西谷彦四郎氏 (1905-90)

「Kimono Beauty—シックでモダンな装いの美 江戸から昭和—」展のきものが作られ、女たちを彩ったころ、文人画を愛した男性がいました。江戸時代中期から日本で起こった文人画は明治期まで盛んに描かれ、文人画を眺め、集める趣味は近年まで根強く存在していたのです。

■西谷コレクションについて

西谷コレクションの作品を集めた西谷彦四郎氏(図1)もそんな文人画を愛した男性の一人でした。西谷氏は明治38年(1905)3月20日静岡市に生まれ、父の仕事の関係で中国大陸に渡りました。大連商業学校卒業後、同志社大学に学び、短い会社勤めの後昭和6年(1931)に皮革流通の事業を立ち上げます。戦争に向かう時勢の中、皮革は物資統制の対象となり、統制会社の役員を務めた西谷氏は、役員仲間から書画鑑賞、収集の手ほどきを受けたといいます。興味の対象は当初から文人画でした。終戦後、美術史家の脇本楽之軒(十九郎、1883-1963)氏と知り合い、収集のアドバイスを受けるようになりました。戦後の経済の変動期には書画の名品が多く流通し、事業が順調だった西谷氏は収集を進めることができました。西谷コレクションはおおむね昭和20年代から30年代前半に形成されたようです。名品を家に置いておいては物騒だと作品を倉庫に預けたため手元での鑑賞の機会が減り、昭和35年頃からはゴルフに打ち込むようになったこともあり、西谷氏の収集への熱意が弱まりました。ちょうど世情が安定し、名品の流通が少なくなった時期でもあります。とはいえ、その後も展覧会への出品依頼や画集への掲載に晩年まで快く応じておられました。このたびコレクションの散逸を案じられたご遺族により、公開に協力的だった故人の遺志を継いで千葉市美術館への寄贈に至ったものです。文人画を好んだことは、池大雅、渡辺華山(図2)、田能村竹田(図3)、高橋草坪(図4)といった収集作品の内容からも明らかで、鋏形蕙斎「東都繁盛図巻」(図5)はコレクションの性格としては異色の名品です。



(図3) 田能村竹田
「歳寒二雅図」
文政10年(1827)



(図4) 高橋草坪「花鳥図」
文政12年(1829)

■文人画か南画か

ここまで文人画、と呼んできましたが南画という呼び名もあります。もともと文人画は宋時代の中国で文人が趣味で描いたもので、南画は南宗画の略で文人画によく見られるような画風の絵を意味します。南画と文人画とは明治初めまでおおむね同じものを指していました。池大雅(1723-76)は中国から伝わった版本の画譜等に学び、日本の文人画を大成しました。大雅は来日した中国人の作品にも学びました。大雅「臨伊孚九山水図」(図6)は伊孚九の作品をそっくり写したとみられます。商人として享保5年(1720)から延享6年(1747)まで6度長崎に渡来した伊孚九は詩文書画を嗜み、その絵は南宗画として高く評価されていました。南宗画に対して北宗画は職業画家の描いたような画風の画を指しますが、江戸時代後期の日本絵画では、南宗と北宗の画風を両方取り入れた南北宗合(南北一致、南北合法)を南画の一形態とする複雑な状況が生じ、渡辺華山も南北合法と呼ばれたりしていました。文人画は鑑賞したり所有したりするだけでなく自分で描くものでもあり、それゆえに素朴なものも量産され、お雇い外国人として日本美術の再評価につとめたフェノロサによって芸術性が低いという批判(明



(図2) 渡辺華山「佐藤一斎像稿 第七」、「佐藤一斎像稿 第三」
文政4年(1821)頃



(図5) 鉄形蕙斎「東都繁盛図巻」(部分) 享和3年(1803)

治15、1882年)ができました。フェノロサの文人画批判と前後して、文人画と南宗画を用語で分ける傾向が表れます。西谷氏の収集は江戸時代のもので、ご本人も文人画と呼んでおられたそうなので本展覧会では文人画と呼ぶことにしました。

■男と女と文人画

江戸時代においては絵画だけでなく社会活動全般が男の世界でした。女性画家の名や作品も伝わりますが、その多くは著名な人物の家族です。文人画も主に男たちによって男たちのために描かれました。女性では池大雅の妻玉瀾(1728-84、図7)が大雅風の文人画を描きました。大雅は妻の老後の生活費とするために書画を残しましたが、玉瀾は自分の絵を売って生活したので玉瀾死後も大雅の書画が残っていて、門人たちはそれを売って大雅を顕彰する大雅堂を建てたといわれています。



(図6) 池大雅「臨伊孚九山水図」



(図7) 池玉瀾「山水図」

展示のタイトルに「再発見！」と付けています。これは西谷彦四郎氏の死後、ほとんど公開されなかった西谷コレクションの作品が再び展示されるようになったという意味です。加えて文人画そのものへの関心が高まり、文人画の魅力を再発見していただければと願って名付けました。西谷コレクションと所蔵の関連作品で構成される文人画の世界をお楽しみください。

[学芸員 伊藤紫織]



(参考) 浦上玉堂「蓮峯雪花図」



(参考) 野口幽谷「牡丹図」
明治19年(1886)

関連イベント

■市民美術講座「文人画再発見！」
1月19日(土)14:00より/11階講堂にて/先着150名/聴講無料
講師:伊藤紫織(当館学芸員)

所蔵作品展 文人画再発見! ~西谷コレクションを中心に~

[観覧料] 一般 200(160)円、大学生 150(120)円

※()内は団体30名以上

※千葉市内在住60歳以上または千葉県在住の65歳以上の方、小・中学生、高校生、および障害者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料

※「Kimono Beauty」展ご観覧の方は無料

Art Book Circus

イベント報告「ART BOOK CIRCUS」

この秋、千葉市美術館では県内の古書店の方々とともに「アート・ブック・サーカス(以下ABC)」というイベントを行いました。きっかけは、今年4月15日にDIC川村記念美術館で行われたABCにて、主催の古書店である smokebooks、かわうそ堂、即興堂の3店主さんとお会いしたことです。今後も美術館などで開催したいというお話を聞き、当館のスペースを使用しては、と提案しました。

DIC川村記念美術館では青空古書市として、広大な敷地の一角で開催されましたが、残念ながら当館にはそのようなイベントを行える屋外スペースがありません。そのかわり、1階ロビーを中心にさや堂ホールや、現在WiCANプロジェクトでリノベーションしているプロジェクトルームを使い、古書の販売だけでなくパフォーマンスも含める大々的なイベントへと発展していきました。

「ブラティスラヴァ世界絵本原画展—広がる絵本のかたち」最終日である10月21日に開催し、当日は美術関係の古書や絵本など(なかには懐かしい紙芝居も!)がロビーに所狭しと並べられ、美術館を訪れたほとんどの方が立ち止まり、珍しげに覗き込んでいました。実際、車以外で美術館にいらした方は1階のロビーを抜けなくては展覧会場に行けませんので、展覧会目当てのお客様をそのままイベントに取り込んでしまおう、というこちらの目論みは大成功です。

(右、下) ロビーでの古書販売



(上) 渡辺明広さんによるスティールパン演奏

(右) おはなしpotさんによるえほん読み

また、古書の販売だけでなくライブペインティングから演奏、絵本読みなどバラエティに富んだパフォーマンスを1日通して行ったことで、その音に引き寄せられるように毎回40名ほどの方が参加され、活気ある会場となりました。

絵本原画展には、ふだんの展覧会よりも子ども連れの方や若い方が多くいらっしゃいます。親子で絵本を選んだり、カップルでアートブックを吟味したり…。展覧会だけでなくABCに参加することで、より美術館を身近に楽しんでいただく機会になったなら幸いです。

[広報 磯野愛]

ABCの舞台裏

絵本原画展最終日を大いに盛り上げた「ABC」ですが、会場の一つとなったプロジェクトルームは、目下、スペースのリノベーションと活用方法についてWiCANプロジェクトで実験中。ABCは空間活用の事例を集める絶好のチャンス、というわけで、プログラムごとに出演者と話し合いレイアウトを提案しました。

中村讓二さんの公開制作では、広いステージを展示台として使いました。空間を斜めに横断するロープから作品を吊るし、それが絵本読みチームの親密な空間に楽しげな色を添えていました。おはなしpotさんによる絵本読みでは、小さな子どもから大人まで、絵本の世界に魅了され引き込まれていきました。オープンであり

ながら適度に奥まったこの空間は、リラックスしつつ集中できる環境といえます。トリをつとめた即興演奏のユニット、ダブルドリブルさんのパフォーマンスではスポットライトが効果的に使われ、展覧会最終日の喧噪を忘れさせる、しっとりとした大人の時間が流れていました。

今回のイベントでは、ロビーからプロジェクトルームにかけて、まるで広場のように自由な祝祭的空間が広がり、パブリックスペースとしての美術館の新たな一面が示されたのではないのでしょうか。継続中のリノベーション・プロジェクトについては、<http://www.wican.org/>にて随時報告いたしますのでご覧ください。

[学芸員 山根佳奈]

◎市民美術講座のお知らせ

「市民美術講座」は、市民のみなさまに千葉市美術館のコレクションを紹介し、作品についての理解を深めていただくものとして、2004年度より実施しております。

今年度下期は右記の内容で行います。聴講は無料ですのでお気軽にご参加下さい。

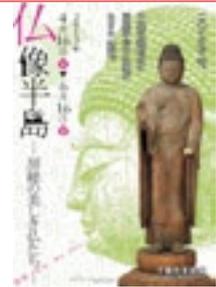
- 第9回 1月19日(土) 「文人画再発見！」
[講師] 伊藤紫織(当館学芸員)
- 第10回 2月9日(土) 「海外に渡った日本美術」
[講師] 田辺昌子(当館学芸課長)

[時間] 14:00より(開場は30分前) [場所] 11階講堂 [定員] 先着150名(入場無料)

◎2013年度 上半期 展覧会のお知らせ

仏像半島—房総の美しき仏たち	4月16日(火)～6月16日(日)
彫刻家・高村光太郎	6月29日(土)～8月18日(日)
[所蔵作品展] 琳派・若沖と花鳥風月	8月27日(火)～9月23日(月・祝)

※都合により予告なく展覧会名、内容の一部が変更となる場合がありますのでご了承ください。



◎千葉市美術館「友の会」会員募集中

展覧会が何度でも観覧でき、展覧会図録も一割引で購入できる「友の会」入会が大変お得です。

[会員の特典]

- 会員は、企画展や所蔵作品展を年間、何回でも観覧できます。
- 会員の同伴者(3名様まで)は、団体料金で観覧できます。
- ミュージアムショップで、展覧会図録やグッズを10%引で購入できます。(一部除外あり)
- 展覧会や講演会等の美術館情報をお送りします。
- 会員対象の催しもあります。

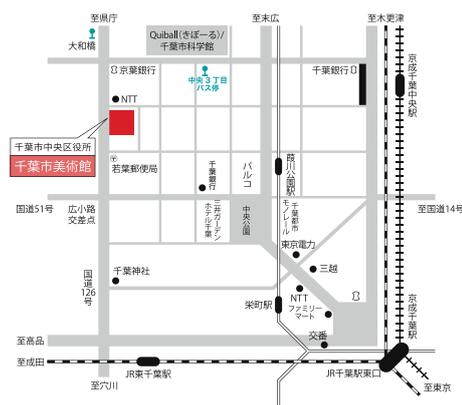
	一般会員	学生会員 (大学・専門)	ファミリー会員 (ご家族4名様まで)
入会金	1,000円	500円	2,000円
年会費	2,000円	1,000円	4,000円

入会のお申し込みは美術館受付にて。

◎編集後記

ここ数年は年を跨いで企画展を開催していることが多く、年明けすぐに新しい展覧会というのは久しぶりです。新年にふさわしい華やかな展覧会「Kimono Beauty」では、きものを着てご来館されると入館料が2割引+粗品をプレゼントする「きもの割引」を実施。初詣や成人式など、きものをお召しになる機会も多い1月。きものを着て、よそ行き気分で展覧会を楽しんでみてはいかがでしょうか？

次号は「仏像半島—房総の美しき仏たち」特集号として4月に発行予定です。展示の舞台裏などをレポートしますのでお楽しみに。(磯野 愛)



[開館時間]

10:00-18:00(毎週金・土曜日は20:00まで)

*入場受付は閉館の30分前まで

[交通案内]

- JR千葉駅東口より
徒歩約15分
- バスのりば7番より大学病院行、または南矢作行にて
「中央3丁目」下車徒歩3分
- 千葉都市モノレール県庁前方面行「霞川公園駅」下車徒歩5分
- 京成千葉中央駅東口より徒歩約10分
- 東京方面から車では、京葉道路または東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ、貝塚IC下車、国道51号を千葉市街方面へ約3km、広小路交差点近く
- 地下に駐車場があります

[編集・発行]

千葉市美術館
〒260-8733 千葉市中央区中央 3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733, Japan
<http://www.cma-net.jp/>
[発行日] 2012年12月18日
[印刷] 株式会社恒陽社印刷所

千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

